

「生きがい」の構造について*

熊 倉 弘

On the Frame of Reference of "Ikigai"

Hiroshi KUMAKURA

1. 「生きがい」の問題

わが国では、1967年ごろから「生きがい論」がさかんに言われるようになった。その社会的理由は、日本の高度成長経済の発展の結果、経済的繁栄とかレジャー時代とかいうことばが巷にあふれるようになり、個人の生き方が見失われつつあるという現実、個人の利益の追求が第一義的になってきていること、あるいは技術革新の波の中で人間はみな疎外状況の中にはうりこまれて生きているという現実の中から、「生きがい」の問題が取上げられている。

明治、大正昭和20年までの日本では、国策としての文明開化・富国強兵政策が日本人を支配してきた。教育勅語を中心とする忠君愛国、立身出世主義に基づく生きがいを万人に強要して、日本人の生きがい感を単一化し、類型化し、ステレオタイプ化してきた。見田宗介¹⁾の見解によると、明治以降の「立身出世主義」の構造をつぎのように述べている。

a) 日本近代の内的推進力としての立身出世主義は、福沢諭吉の「学問のすすめ」と中村正直の「西国立志篇（原名 Self-help 自助論）」によって推進され、b) 立身出世主義の周辺には、「金次郎主義」が立身出世主義観念の誘導水路となり、藤吉郎主義の農民版をつくり、学校制度が現実の誘導水路の役割をなし、官員登用のルートを形成した。そして家を中心とする共同体では、家名をあげるとか郷党のホープとを、中央志向（都・東京志向）の心性を形成して、準抛集團の両極性を産み出した。c) しかし、その内在的矛盾として、(1)競争原理と家郷依存（普遍主義的対個別主義的）とが家郷解体の意識を生み(2)国家公共に寄与するという公的理念と家郷の利益という私的動因との対立が、立身出世主義の構造的な偽善性の意識を生じさせた。(3)欲望の追求と欲望の禁圧との対立、(4)理念の普遍化と機会の限定とが相重なって禁圧された欲求不満の蓄積を通して人間の心に不信と懐疑を抱かせる結果となった、と。

昭和20年からの戦後においては、新憲法による自由平等の原則の確立により、絶対的価値の崩壊をきたし、価値の多元化、多様化がもたらされた。そして、そのことによって生きがいの多様化、生きがいの大衆化が生じ過去の忠君愛国とか立身出世というような特定の生きがいというものがなくなり、どれもこれも生きがいとなるような社会状況を産み出してしまった。したがって、今日的には生きがいというものは、つかみどころのないものになってしまっている。例えば、今日ホワイトカラーの生きがいを見ると、(1)新エリート志向の兆標として、かれらの生きがいは、地位の上昇、会社の仕事で実績をあげる、上役に認められる、会社の勉強な

* 本題は、昭和46年度岩手心理学会第13回大会において発表したものである。

1) 見田宗介：現代日本の心情と論理—立身出世主義の構造 p. 185～筑摩書房 1971

どが強調される。(2)マイホーム志向としての生きがいは、子どもの成長をみる、一家だんらん、家族旅行、自分の家をなおしてきれいにする、たまに早く帰って子どもと遊ぶが求められている。また(3)抵抗者志向としての生きがいは、組合活動の中に求めているようである。

「生きがい」という語を広辞苑(第2版)によると、「生きているだけのねうち」とか「生きている幸福・利益」と説明している。また「生きがい」に似たことばとして「はりあい」をあげて「生きがい」の一面をよくあらわしている」と説明している。とにかく、「生きがい」という語は、人間の生存ということの持つ「価値」の問題であると考えべきである。生きがいというとき、人生の意義とか、人間の意味というように解するならば、そこに人間がある限り、人生がある限り、つねに問われるべき問題であろう。そこからは、人生無価値論も生まれるであろうし、人生有価値論も出てくるであろう。また、生きがいということは、二様の人生の意味のうち、人生を主体的に問うところに生じた生きがいと人生観、人間観とのかかわりを見ることができよう。ここに人生の意味と生きがいのつながりが生じてくる。高橋和巳²⁾は、「人間には、内面にそれぞれのドラマがあって、人はそれぞれ希求する葛藤の中で自らを試し、あるいは闘うことによって生きがいを感じるものなのである。平穩無事、天国のような無風状態など、人はほんとうに望んではいない……」といっている。

また、「生きがい」という問題は、そのもっとも深い層では、人類の歴史のなかで、生きる手段が中心の問題である時代から、生きる目的が中心の問題である時代への巨大な過渡期としての現代を性格づける根源的な問いとして把握されなければならない問題でもある。すなわち、今日の管理社会の出現は、いわゆる社会の二極分解を生じさせている。文明社会の提供する便益を最大限に利用しながら、ほしのままに、その欲望をみたして人生を送る。その結果、犯罪も現在よりもさらにふえるかもしれないし、進歩した麻薬にふけて日をつぶすものが多くなるかもしれない。また創造的活動に打ちこむものもいるであろうし、単純労働を楽しみのためにおこなうものもいるであろう。種々雑多な人間が出現するであろうが、彼らの勝手な行動の総和が、社会の破滅をもたらすことだけではないようにと、管理者チームは必死の努力を傾注するであろう。すなわち、管理社会においては、比較的小数の管理者チームに情報と実質的権力が集中し、大多数は、無意識のうちに、その管理を受ける側にまわる、という二極分解の社会構成が成立する。いわゆる大衆の価値感は雑多となり、その生きがいも各種なものになってくることは必然である。たとえば、政治において、次第に民主主義政治の実が失われ官僚というエキスパートの、必ずしも悪意によらない、むしろ一種の合理主義に立った社会管理が、前面にうかびあがってきたということは、多くの先進諸国についていわれていることである。そうして、一般大衆は、儀式的な政治参与に満足し、次第に量をますレジャーを、自分の好きなようにつかうことを、だんだんおぼえ出してきている。その結果、多くの混乱と不安定を生じてはいるが、しかも総体として、社会全体は、何とかまとまった存在をつづけている。あるいはまた、学習におけるティーチング・マシンの例があげられるであろう。教育ということは、単純に考えれば、これを受けるものからみれば、未知の領域にふみこむ探検にも似たものである。しかし、教える側からみれば、既知のことをくりかえすことにすぎない。そこに、創造性の介入する余地は比較的少ない。だから、教育の能率化そのものについてのイノベーションの競争が存在しているあいだけ、教育者は競争社会で生存権を持っているが、教育工学が発展し、

2) 高橋和巳：人間にとって p. 31~32 新潮社 1971

比較的高級なカリキュラムについても、中央で標準的なコースを短期間で作成することが可能になれば、教育者の仕事はルーティン化し、これに従事しているものは、単純労働者と同様の評価を受けるようになるかもしれない。教育者としての生きがいは何かと問われることが、より深刻化することは必然となる。

物的生産力の加速度的な進歩は、価値感や生き方をどんどん変え、情報化・流動化社会は、雑多な多様な価値感を無選択に伝達し、科学技術の進歩は、自然から与えられたもの（運命的なもの）すべてから人間は解放されるという幻想で人びとを感懐している。生物としての女性の否定が女性を解放し、核家族化は祖先、親、子、孫という連続性の中での自分を忘れさせ、空間移動力の増大は、故郷を人びとから奪っている。日本人論ブーム、生きがい論ブームは、この日本人の同一性探求への不安と焦燥の産物といえそうである。

「生きがい」をめぐる問題は、きわめて複雑多岐をきわめている。要するに人間の行動には目的があるが、その目的をつぎつぎと追求してゆくと、自分は何のために生きているのかという究極の問いにつきあたる。この究極の問いにたいして、それぞれの人が、実感をこめて答える仕方が「生きがい」であると定義することもできよう。ここには、ひとりの人間が彼の人生において出合うさまざまな条件や事件をつらぬいて、その生き方を全体としてみちびき方向づけている規制原理としての「生きがい」であろう。したがって、逆にこのような、人生全体に意味を与えて賦活する力としての「生きがい」の感覚が失われるとき、人生はたんなる生物有機体としての生存の惰性に解体してしまうであろう。「生きがい」は精神のパンといわれる。それは生きがいが、人間が人間であることの条件そのものと深くかかわっていることを示しているからであろう。しかし一方「生きがい」は、日本語独特のことばといわれ、英語、フランス語、ドイツ語にはないという。「生きがい」という概念が、哲学や科学の多くの重要な用語とちがって、日本人の生活の歴史のなかから生みだされた語であって、「生活的なふくみ」を持っていることが、その特徴のようである。

本論文では、「生きがい」という、まことにつかみどころのないような価値の問題について「生きがい」を規定しているような枠組みとか、構造らしきものの実体を整理してみたいと考えるわけである。

2. 生きがいの構造（しくみ）

「生きがい」が問われることの今日的事情がある。すなわち、今日「生きがい」とみられるものには、(a) 商品としての生きがい、(b) 報酬としての生きがい、(c) 生きがいとニヒリズム、(d) 疎外と生きがいというものが「生きがい」の問題点として挙げることができる。(a') 商品としての生きがいの問題からは、人間性回復と生きがいの問題、(b') 報酬としての生きがいからは、何か生きがいある人生を送ろうということから、挫折感と生きがいの問題が、(c') 生きがいとニヒリズムの問題からは、生きがいの有用性、必要性、実用性という価値論をさかんに行っている今日的事情であると考えられる。

1) 生きがいの分析 (1) 荻野恕三郎氏⁹⁾は、その著「生甲斐の構造と批判」の中で、つぎのように分析している。

- A. 仕事が生きがいであること
 - a. 経済的, 功利的要因……賃金
 - b. 社会的評価……………自己存在の確認 (他人の評価)
 - c. 仕事による自己実現……人間形成
 - d. 仕事自体……………仕事に熟中

- B. 家庭が生きがいであること
 - (1) 子どもが生きがいであること
 - a. 自己存在の永続性
 - b. 直接的な交流
 - c. 相互必要性の確認
 家族間で相互に感じる生きがい
 - (2) 家庭が生きがいであること
 - a. 自己存在の永続性
 - b. 直接的な交流
 - c. 相互必要性の確認
 - d. 自己実現の自由な場
 - e. 人格的交流
 - f. 故郷性の母胎
 - g. 愛の交流

- C. 愛が生きがいであること
 - a. 存在の確認
 - b. 存在価値の確認
 - c. 単独性 (愛の単独性)
 - d. 自発性 (愛の自己創造性)
 - e. 公明性
 - f. 生産性 (愛する人との間に子どもを産む)
 - (1) 希望が生きがいであること

- D. 未来・希望・理想・目的が
生きがいであること
 - (1)
 - a. 活気性…希望は「生存への活気」(マルセル)
 - b. 自由性
 - c. 信頼性
 - d. 存在価値の確認
 - e. 紐帯性と生命性…希望は自他の間の係わりを持たせる
 - f. 開放性
 - g. 創造性
 - (2) 理想・目的が生きがいであること

- E. 自己実現が生きがいであること…自己の向上, 自己の人間性の向上, 自分の生活の充実…人間形成

また, マスロウ (Maslow. A. H.) は欲求と階層組織の中で, 生きがいの源泉は欲求であると考えて, 最底次元の生理的欲求からはじめて, 安全の欲求, 所属と愛情の欲求, 尊敬の欲求から最高次元の自己実現の欲求を挙げて, 生きがいとの関係を考えているようである。

(2)生きがいの構造(しくみ)について, A. 坂元昂氏⁴⁾は, 生きがいのしくみについて, つぎのように述べている。

生きがいのしくみ { (1)目標としての生きがい } → この二つの条件が, わたくしたちに生きがいを
 { (2)プロセスとしての生きがい } → 感じさせてくれる

1970年12月 4,552人の調査結果 (毎日新聞社)

生きがいを持っている 64% 持っていない 31% 無答 5%

4) 坂元 昂: 能力はどこまでのばせるか p. 50 講談社現代新書 1971

| | | |
|-----------------|-----|---------------------|
| 生きがいとは何か………家族家庭 | 43% | —未来の家庭設計（目標達成が生きがい） |
| 仕事・勉強・家事 | 22% | （プロセスとしての生ががい） |
| 精神的なもの | 10% | |
| 趣味・旅行 | 5% | |
| 健康 | 4% | |
| 物質的なもの | 3% | |
| 社会条件 | 2% | |

B. 吉田禎吾氏⁵⁾は、生きがいとか意欲は、世界観の問題でもあると述べている。

楽天的な世界観の背後には、意欲にみちた生きがいがある。

(例) 楽天的世界観を持つオトロ族（アフリカ・スーダンの山中）の社会には年令階層制があり、社会的役割がきめられている。

死霊をおそれず、自然や超自然に従順で、明るく楽天的生き方をしている。それに対照的なものは、厭世的世界観を持つヘイバン族（アフリカ・スーダンの山中）は、が死霊や自然をおそれ、暗く厭世的である。そして、オトロ族の持つような年令階層制や社会的役割もきめられていない。

年功序列制の社会では、組織全体に生きがいを感じさせるところの、組織に対する依存心や所属感が生ずるが、反対に能力主義の社会になると、組織内で能力が発揮できなければ、生きがいを消失させてしまうことになる。

と説明している。つまり、坂元氏の言を借りていえば、生きがいを育てることの必要性を認め、目標としての生きがいの上に、プロセスとしての生きがいを発見させるように仕向けることになる。

C. 神谷美恵子氏⁶⁾は、国立療養所長島愛生園の入院患者に精神医学的検査の中での文章完成テストの結果について、つぎのように述べている。

男性軽症患者 180 名のうち

(1)ほとんど半数の者は、「将来になんの希望も目標も持っていない」で毎日人生の無意味感に悩んでいる。「毎日、時をむだにすごしている」、「無意味な生活を有意義にくらそうと、むだな努力をしている」、「たいくつだ」ということである。

(2)ごく少数のうち……生きるよるこびをきわだって感じさせるものとして、「この生活は、かえって生きる意味に尊厳さがあり、人間の本質に近づき得る」、「将来、人を愛して己が生命を大切にするように、ますますなりたい。これは人間の望みだ、目的だと思う」とある。

同じ条件のなかにも、あるひとは生きがいを感じられなくて悩み、あるひとは生きるよるこびにあふれている。このちがいはどこから来るであろうか？。性格の問題か？、生活史や心の持ち方のちがいか？、対人関係や社会のしくみのためか？

と疑問を投げられている。わざわざ研究などしなくても、初からいえることは、人間がいきいきと生きて行くために、生きがいほど必要なものはない、という事実である。それ故に人間から生きがいをうばうほど残酷なことはなく、人間に生きがいを与えるほど大きな愛はない。しかも、ひとの心の世界はそれぞれちがうのであるから、たったひとりのひとにさえ、生きがいを与えるということはなかなかできるものではないと、神谷氏は述懐している。

前にも述べたことだが、生きがいということばがあるということは、日本人の心と生活の中

5) 吉田禎吾：呪術 p.100~104 講談社現代新書 1970

6) 神谷美恵子：生きがいについて p. 8~9 みすず書房 1967

で、生きる目的や意味や価値が問題にされてきたことを示すものであろう。いかにも日本語らしいあいまいさと、それ故の余韻とふくらみがある。それは日本人の心理の非合理性、直観性をよくあらわしているとともに、人間の感ずる生きがいというものの、ひとくちにはいい切れない複雑なニュアンスを、かえってよく表現しているのかも知れない。

「生きがい」に似たことばに、「はりあい」というのがある。これは「生きがい」の一面をよくあらわしていると思う。自分の生きていることに対して、自分のとりまく世界から、何か手ごたえを感じないと心身ともに健康に生きて行きにくいらしい。これは、いわゆる感覚遮断の実験によってもよく説明されることである。

「生きがい」ということばの使い方には、ふた通りある。第1は、この子は私の生きがいです。などという場合のように、「生きがいの源泉」、または「対象」となるものをさすときで、普通、「生きがい」といわれているものである。第2は、「生きがい」を感じている「精神状態」を意味するときで、フランクルのいう「意味感」に近いもので、「生きがい」感と呼ぶべきものである。

2) 感情としての生きがい感 生きがいを感じずる心には、いろいろな要素がまじりあっている。端的にいって、生きがいについていちばん正直なものは感情であろう。ある人に真のよろこびをもたらすものこそ、その人の生きがいとなりうるものであるといえる。このよろこびの感情は、心のなかにさまざまな副産物をもたらすのである。ペルグソンは、よろこびには未来に向かうものがふくまれているものとみている。「よろこび」は明るい光のように暗い未知の行手を照らし、希望と信頼にみちた心で未来に向かわせるといっている。ウィリアム・ジェームズは、「よろこび」というものの、もう1つきわだった特徴は、それはふしぎに利他的な気分を生みやすい点である。生きがいを感じているひとは、他人に対してうらみやねたみを感じにくく、寛容でありやすい。それはマックス・シェラーが言っているように、自分より幸福なひとびとに対するひそかな憎しみの念がはいりふむ余地がないからである。

A. 生きがい感は、よろこびであり生の充実感であり、生存充実感である。生の充実感には、さまざまな感情の起伏や体験の変化を含んでいるところのもので、生の内容がゆたかに充実しているという感じであって、生きがい感の重要な一面である。ルソーは「エミール」の初めの方でいっている。「もっとも多く生きたひととは、もっとも長生をしたひとではなく、生をもっとも多く感じた人である」^{*}と。

生存充実感は、「体験された時間」という角度から言えば、時間の流れに対する適度の抵抗感が必要である。ほんとうに生きている、という感じを持つためには、生の流れはあまりになめらかであるよりは、そこに多少の抵抗感が必要である。ただし、その際、時間は未来にむかって開かれていなくてはならない。苦勞して得たものほど大きな生きがい感をもたらす、ということは一つの公理ともいえよう。

B. 生きがい感と幸福感とのちがいは、生きがい感は幸福感の一種で、しかもそのいちばん大きなものである。そのちがいの第1は生きがい感は、幸福感の場合よりもいっそうはっきりと未来に向かう姿勢がある。現在の生活を暗たんとしたものを感じても、将来に明るい希望なり目標なりがあれば、それへ向かって歩いていく道程として現在に生きがいを感じられるであ

※ フランス語でいう、存在理由 (raison d'être) とあまりちがわないかも知れないが生きがいという表現には、もっと具体的、生活的なふくらみがあるから、むしろ、生存理由 (raison de vivre raison d'existence) といった方がよさそうである。

ろう。第2は、生きがい感の方が自我の中心にせまっているという点である。幸福感の中には、自我の一部だけ、それぞれ末梢的などころだけで感ずるものもたくさんある。第3のちがいは、生きがい感には意識的にせよ、無意識的にせよ、価値の意識がふくまれることが多いことである。

生きがい感のなかに、自我感情がふくまれていることは、以上からも明らかである。この自分が生きている意味があり、必要があるのだという感じである。したがって、ひとが仕事をえらぶ場合にも、もし生きがい感をたいせつにするならば、世間体や収入よりも、なるべく自分でなくてはできない仕事をえらぶのがよいということになる。

青年時代に、生きがいについて悩むひとはかなりいても、おとなになると避けておくのが普通になる。男のひとは、一応まとめた職業につき、家族を養うことができれば、自分の生活は生きるに値するものと心のどこかで簡単にかたづけてしまおうし、女のひとは、なおいっそう素朴に、一応平和な家庭を営み、家族そろって健康で仲よく暮せれば、その中心である自分の存在意義を十二分に感じて安らいでいるようである。しかし、長い一生の間には、ふと立ちどまって自分の生きがいは何かと考えてみたり、自分の存在意義について思い悩んだりすることが出てくる。この時は明らかに認識上の問題となってくるわけである。

3) 認識としての生きがい感 生きがい感が認識上の問題となった時の問いの発せられ方には4つあるであろう。(1)自分の生存は、何かのため、または誰れかのために必要であるかということで、老人期の悲哀の大きな部分は、この問いかけであろう。(2)自分固有の生きていく目標は何か。あるとすれば、それに忠実に生きているか。(3)以上あるいはその他から判断して、自分は生きている資格があるか。(4)一般に人生というものは、生きるのに値するものであるか、である。以上にあげた4つの問に答えるには、すべてある価値の基準が前提となるが、それはその人の持つ価値体系であろう。

もし、生きがい感というものが、以上のようなものであるとすれば、どういう人がいちばん生きがいを感じずる人たちであろうか。それは、使命感に生きるひとではなかろうか。人間はみな多かれ少なかれ漠然とした使命感に支えられて生きているのだといえる。それは、自分が生きていることに対する責任感であり、人生においてはかならず自分が果たすべき役割があるという自覚である。したがって特殊な現象としてではなく、人間の生存の基本的な要素として、この使命感をみななければならない。

4) 生きがいを求める心 生きがいへの欲求の領域は、むしろ生物学的欲求の領域のおわるところから始まると思える。明らかにこれは、精神的存在としての人間の欲求であろう。サリヴァン(Sullivan, H. S.)は、人間の基本的欲求として、生物学的な満足と社会学的な安定をあげている。オールポート(Allport, G. W.)は、生きがいへの欲求は、単に社会的存在としての人間の欲求ではなく、個性的な自我の欲求であるといい、マスロー(Maslow, A. H.)は人間の成長動機として、いきいきと生きようとする欲求をいっている。キャントリル(Cantril, H.)は、人間はあらゆる経験に際して、直観的に価値判断を行なうようにできているとし、それを経験の「価値属性(value attribute)」とよんでいる。そして人間のもっとも普遍的で本質的欲求は、「経験の価値属性の増大」を求める傾向であろうといっている。ウィルソン(Wilson, C.)は、「宗教と反抗人」という続篇の中で、人間のいちばんの願いは、「生命の一そう大きな強烈さ greater intensity life」へのあこがれであるといっている。

要するに、人間の基本的欲求は、(1)生存充実感への欲求、(2)変化への欲求(オールポートの

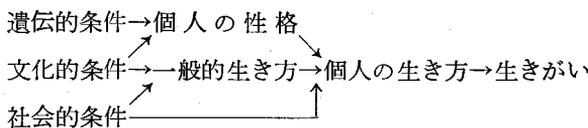
「新奇な経験への欲求」), (3)未来性への欲求, (4)反響への欲求 (はりあいを求める心), (5)自由への欲求, (6)自己実現への欲求, (7)意味と価値への欲求—人間はみな自分の生きることに意味や価値を感じたい欲求を持っている, という。以上の如く, 意味づけ, 価値づけという心のはたらきは, 知覚のみならず, 感情, 思考, 学習, 記憶その他, 人間のあらゆる生体験の中にふくまれているのではないかと思われる。いいかえれば, ひとは自分でもそうと意識しないで, たえず自己の生の意味をあらゆる体験のなかで自問自答し, たしかめているのではなからうか。そして, その問いに対して求める答は, どんなものでもよいから自己の生を正当化するもの, 生肯定的なものでなくては生きがいを感じられないのであろう。

5) **生きがいを求める場** 生きがいを求める気持が生きがい欲求であり, 生の喜びを味わうというときの感じが生きがい感である。例えば仕事とか子どもを生きがいにするという場合, それは生きがいの対象の問題であり, 生きがいを求める場につながっている。生きがいの対象は, 人間がよく生きていこうというイメージを伴った人間的欲求のあらわれであって, 大脳生理学的には前頭葉が関係して行われる欲求 (所有欲・支配欲など) だけが生きがいに関係するといわれる。しからば, どうして人々は, 自分の生きがい対象となるものを見出すかが問題である。人間の生きがいはすべて人間の「生きかた」との関係で考えられるものである。「生きかた」は「生きがい」を決定する土台である。それは, 何を生きがいとするかを決定し, それによる行動に「生きがい感」を与えるからである。もちろん, 「生きかた」と「生きがい」が同じ方向をとるとは限らないであらう。

「生きがい対象」を発見するところを, 生きがいを求める場とすると, つぎの段階について考えることができる。(1)農業社会の段階においては「家」が生きがいを求める場となっている。(2)工業社会の段階では, 「家」と「職場」である。(3)脱工業化社会の段階では, 「家」と「職場」のほかに「余暇」が加わってくる。さらに(4)未来社会においては, 「家」, 「職場」, 「余暇」のほかに, 「第2の家」, 「第2の職場」, 「第2の余暇」が加わってくるであろうと推測されている。社会の発達段階に応じて, 生きがいの多様化多重層化が生まれてくるというのである。例えば, シュプラングァーの生活様式は, 生きがいのタイプと考えることができる。

| シュプラングァーの分類 | カンドール分類 | デルマ・ポルの精神的特性 |
|----------------|---------|--------------|
| 理論人 | 真理型 | 知性 |
| 経済人 | 経済型 | 貧欲性 |
| 権力人 | 権力型 | 活動性 |
| 宗教人 | 宗教型 | 社高性・善良性 |
| 審美人 | 審美型 | 情動性 |
| 愛情人(社会人)…対応なし… | 享楽型 | 社高性・善良性 |

6) **生きがいの成立** 宮城音弥氏⁷⁾によると, 生きがいの成立条件として遺伝的条件と文化的条件と社会的条件の3つを挙げている。そして, 生きがいの成立との関係をつぎのように説明している。



7) 宮城音弥：日本人の生きがい p. 69 朝日新聞社 1971

そして、生きがいと環境との関係に論及していと。すなわち、環境からの影響として、

- { 第 1. 環境→性格→個人の生きかた→生きがい
- { 第 2. 環境(社会の考え方)→生きがいの内容

を示している。環境は、教育と宗教とにわけて考えられる。日本人の場合で見ると、過去においては、教育勅語を中心とする教育により、生きがいの単一化がなされたが、現在は、価値の多元化(多様化)が生きがいの多元化、生きがいの多元化が生きがいの大衆化をもたらし、どれもこれも生きがいの対象となる人間の分裂現象を来たしている。さらに未来の生きがいは、より享楽主義的傾向が強くなるであろうといわれている。

7) **生きがいの特徴** 生きがいの特徴を考える場合には、いろいろな掴み方があるであろう。つぎに例として挙げてみると、

第 1. 生きがいというものが、ひとに「生きがい感」をあたえるものである(生存充実感)。

第 2. 生きがいというものが、生活をいとなんでいく上の実利実益とは必ずしも関係がないということ。つまり「無償の」活動であり、一種のむだ、ぜいたく、遊びの性格を帯びている。

第 3. 生きがい活動は、「やりたいからやる」という自発性を持っている。「生きた挙動」である。

第 4. 生きがいというものは、まったく個性的なものである。それぞれの人びとの内奥にある、ほんとうにある自分にぴったりしたもので、その自分そのものの表現である。

第 5. 生きがいは、それを持つひとの心にひとつの価値体系をつくる性質を持っている。いくつもの生きがいのうち、いちばんたいせつなものは何か、次には何をという序列がある。

第 6. 生きがいは、ひとがその中でびのびと生きていけるような、そのひと独自の心の世界をつくるもので、統一があり、秩序があり、調和があつて、すむ人に安定を与えるものである。というようなものである。

生きがいというものは、人間がいきいきと生きていくために、空気と同じようになくなくてはならないものである。しかし、私たちの生きがいは損われやすく、うばい去られやすいものである。人間の生存の根底そのものに、生きがいをおびやかすものが、まつわりついているためであろう。生老病死という人生の四苦は、現代もなお人間生存の厳然たる事実である。人間が、どうしても逃がれない力の重圧のもとにあえぐようなぎりぎりの状況を、ヤスパースは限界状況と呼んだ。これをもたらずものとして、ハイデカーは「死と責」、ヤスパースは「死、苦、争、責」、マルセルは「死と背信」を、そしてサルトルは「死と他人」を挙げている。これらのものは、生きがいを奪い去る原因となっていると考えてよいであろう。すなわち、(1)難病にかかること、(2)愛する者に死なれること、(3)人生への夢がこわれること、(4)罪を犯したこと(ブーバーの言う「自己照明」とか「実存的罪悪」)、(5)死と直面すること。これはすべてのものへの「遠のき」の現象で、「死の相のもとに」人生をみるというべきであろう。人間は死に直面したとき、残されたわずかな生きる時間のなかで、新しい生きかたを採用し、過去の生に新しい意味を賦与することさえありうるようである。(6)その他、まだまだあるであろう。

生きがい喪失者の心の世界から、生きがい特徴の反面をうかがうことができそうである。たとえば、

(1) 破局感と足場の喪失…「底知れぬ闇の中に無限に転落して行く」メルロー・ポンティは、「闇とは自分の前にある対象物ではない。それは自分を包み、あらゆる感官を通して、自分の

中に侵入し、もろもろの思い出をちっ息させ、自分の個人的な素性をほとんど消し去ってしまう。(知覚の現象学)」といている。ミンコウスキーは、「闇は構造もなく、表面積もなく、私との間に距離もない純粹な深淵である」といている。

(2) 価値体系の崩壊…価値体系の崩壊は、感情・欲求・知覚などの生体験のあらゆる面に影響を及ぼすこと。

(3) 疎外と孤独…自分の所属している集団からの疎外感は、やがて人生全体からはみ出しという感じを生む。

(4) 無意味感と絶望

(5) 否定意識

(6) 肉体との関係…心と体が、ばらばらになる傾向(肉体と精神とが無関係の関係になること)。いわば、肉体にひきずられて生きてゆく存在(生ける屍)。

(7) 自己との関係…自己嫌悪の状態や、社会的役割の喪失。

(8) 不安…「実存的不安」または「世界観的不安」であり、実存的不安には、死の不安と無意味さの不安と罪の不安とがあること。

(9) 苦しみ…精神的苦しみと肉体的苦しみ。

(10) 悲しみ…人はもがくことをやめた瞬間から、悲しみは潮のように流れ出て、心の中のあらゆるものにしみわたり、外界に見えるものまですべてを哀愁の色に染めてしまう。そこには、もたえやあせりの態勢にはみられない統一と諦観の静かな美しさがある。悲しみは、死と虚無とを志向するものである。スピノザは、「悲しみは悪である」といている、などがある。

8) 生きがいの構造図式 人間は、自分でも意識しないが、たえず、自分の生の意味をあらゆる体験の中で自問自答し、たしかめながら生きているのではなからうか。そして、その問いに対して求める答は、どんなものでもよいから自己の生を正当化するものでなくては、生きがいは感じられないのであろう。「生きがい」というものの正体、あるいはどういう要素とか要件によって構成されているものか、その心理構造を考えてみることは「生きがい」の本質のようなものを把握するのに役立つことであらう。

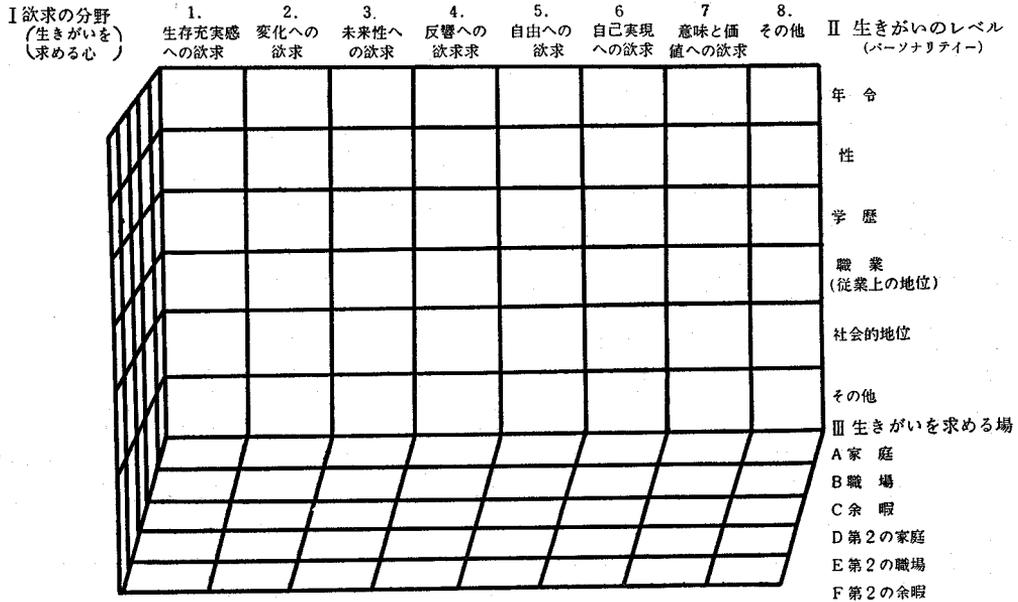
「生きがい」の本質を、(1)欲永の分野(生きがいを求める心)、(2)生きがいのレベル(パーソナリティ)と、(3)生きがいを求める場の次元から把握することが可能と考えて、次の図式を考えてみたのである。

生きがいの問題は、その最も深い層では、人類の歴史の中で、「生きる手段」が中心の問題であった時代から、「生きる目的」が中心の問題である時代への、巨大な過渡期としての現代を性格づける根源的な問いとして把握されなければならない。

つぎに、この図式(枠組み)について簡単な説明を加えることにする。この3次元の関係において中心的役割をするものが、「生きがいのレベル」の次元である。この次元において指標となるものは、年齢、性、学歴、職業(従業上の地位をも含む)、社会的地位(社会階層)、地域性などが挙げることができよう。(1)年齢による「生きがい」の変化—年齢による人生観のちがいで、その生きがい感が変わってくる。見田宗介⁸⁾は、「生きがいの年齢的变化」を、1968年NHK放送世論調査所においても調査している。それは、変化する時代の流れの中で、それぞれの年代層が、その人間形成期において体験してきた時代の性格の反映という意味

8) 見田宗介：現代の青年像 p. 24 講談社現代新書 1971

生きがいの本質



であると同時に、また単に、人の年齢がすすむにしたがって、精神的にも成熟し、社会的な地位や役割も変化するに応じて人生観が変わってくることによって、生きがい感にも変化を生ずる側面もある。すなわち、ライフ・ステージによる生きがいの変化がみられるのである。

(2) 地方による「生きがい」の変化—まず都市と農村では一般的に大きなちがいはみられないのであって、むしろ、それぞれの地方による生きがいの差異のほうが大きいという事実がある。見田宗介⁹⁾氏は、「生きがいの地域的特質」をまとめて発表している。また、総理府の1967年青壮年調査では、5大都市住民の「生きがい」の比較をまとめている。

(3) 階層による「生きがい」の変化—1968年NHK調査では、「階層と仕事の生きがい」の変化は、全体としてははっきりみられることは、一般に階層が高くなるほど、仕事に生きがいを見出す比率が高くなるということである。また青壮年調査（総理府）においても、年収の多い層に所属しているという意識をもつ層、「エリート」や「指導層」に属すると自認している人びとなどにおいて、いずれも「仕事」に生きがいを見出す比率が高いことが示されているということである。

(4) 学歴による「生きがい」の変化—1967年青壮年調査（総理府）では、「学歴と仕事の生きがい」の関係の結果を出している、1968年NHK調査でも同じような調査結果を発表している。すなわち、家庭的な生きがいだけをのぞいては、一般にどの種類の生きがいも、学歴が高いほど大きいという結果をみせている。いいかえれば、学歴の高い層では、ひとりひとりの人

9) 見田宗介：現代の青年像 p. 26 講談社現代新書 1971

がより多くの多面的な生きがいを持つ傾向があるということである。

(5) 職業による「生きがい」の変化—1967年青壮年調査、1968年NHK調査などにおいて発表している。すなわち、経営管理者の生きがい、自営商工業者の生きがい、農民の生きがい、主婦の生きがい、高校生・大学生の生きがいブルー・カラーの生きがいとホワイト・カラーの生きがいなどについて、それぞれの特徴を分析している。

ここに、一人の人間を考える場合に、生きがいのレベルにおける個人のパーソナリティによって、生きがいを求める心（欲求の分野）に特徴が生じ、その欲求をどの場面において追求するかということ、生きがいを求める場が考えられることになるであろう。あるいは、逆に、個人のパーソナリティに統合されたものが、その人の住む環境（生きがいを求める場）に制約されて、生きがいを求める心を規制することもありうるであろう。とにかく、人間の「生きがい」というものは、基本的には生きがいのレベルと生きがいを求める心と、そして生きがいを求める場という3次元の関係において説明することができそうであるということである。

9) **生きがいの現実像** われわれの生きがいの問題は、古典的な哲学的意味の「生きがい観」からかけ離れて、主観が対象に対して持つ有用性の問題、それが生きがいというものであるというふうに逆転するようになってきている。具体的表現をすると、人間の生きているということの値打ちは、決して勤めている会社や地位や給料できまるものではないという古典的生きがい論に対して、人間の生きがいは、地位や収入できまるものだという即物的物質的な考え方に変わってきている。当世流の生きがいの哲学の成立の基盤は、地位と所得を保証する会社にある。ここに不況によって、不況の成り行きによって、新しい生きがいを探し求め、またしてもその中に生きる価値を求めなければならなくなるひとつの背景があるといえよう、「不況→合理化→生きがいの再探求」という図式成立の根拠がここにあるといえよう。まさに、転倒した生きがい観こそ、今日的生きがいの実像ではあるまいか。

(1) NTVによる全国世論調査(1963年7月と10月実施)によると、あなたは、「毎日の生活の中で、なににいちばん生きがいを感じていますが」については、

・仕事に関するもの ・内面的な生活の充実や向上に関するもの ・生活をエンジョイットすること ・将来への夢や希望をもつこと ・子ども(孫)に託した生きがい ・家庭の円満に関するもの ・経済生活の向上に関するもの ・身近かな人間関係に関するもの ・社会一般に関するもの ・信仰や理想に生きること ・生きているとそれ自体 など、
に生きがいを感じていると答えている。

(2) 見田宗介氏¹⁰⁾は、「現代日本の精神構造」の中で、「戦後の変化が政治や社会のしくみに対する日本人の考え方を变えただけでなく、一人ひとりの人生に対する根本的な姿勢そのものを变えてしまっている」ことを指摘している。今日の成人した日本人にとって、最大の生きがいは「子どもたち」である。とくに女性の場合子どもに賭ける期待は圧倒的である。男性の場合にもまた、子どもに託した夢は大きい。しかし男性の場合にはやはり、仕事・労働の中に見出す生きがいが、それを上まわる。すなわち、男性の生きがいは「仕事と事業」女性の生きがいは「子どもと家庭」というパターンが、今日もおおかなりはっきりと存在していることを指適している。

さらに、年齢による変化、職業・学歴による相違、支持政党と生きがいの関連などについて

10) 見田宗介：現代日本の精神構造 p. 58～ 弘文堂 1965

も分析している。

(3) 本間康平氏¹¹⁾は、「生きがいに関する世代格差」の中で、自分の生活の中で、いちばん生きがいを感じずるものとして、若年層は余暇活動に、高年層は家庭サービスに生きがいを感じていると報告している。両者の共通点としては、若年層も高年層も、同じように、会社で仕事をするとき生きがいを感じずることはないという点である。

(4) 総理府青少年対策本部報告¹²⁾によると、青少年の生きがいは、

総数 135,853人 (年齢15才～24才 男女)

| | |
|------------------------|-------|
| 1. スポーツや趣味に打ちこんでいるとき | 43.5% |
| 2. 友人や仲間といるとき | 38.8 |
| 3. 仕事に打ちこんでいるとき | 30.4 |
| 4. 家族といるとき | 21.1 |
| 5. 他人にわずらわされずにひとりであるとき | 18.1 |
| 6. 親しい異性といるとき | 14.0 |

(以下略)

となっている。

以上の諸例からみられることは、「生きがい」を固有に生きがいたらしめるものは、まず何よりも、先に「仕事」の項で抽出し、「家庭」の項で確認し、さらに「余暇」が中心的な生きがいであるときにも多く発見することができる。『往生要集』に、「また浄土の菩薩・羅漢・諸の衆生等は、若し食せんと思ふ時には、六宝の机、自然と前に現じて、七宝の鉢に、微妙なる食満てり…」と極楽浄土を描いている。もうそこには生きがいは発見されないであろう。ゲーテは、その「ファウスト」の最終場面で、ファウスト博士が、至高の瞬間を求めてその遍歴の最後に選んだ土地として、人びとが力を合わせて高潮とたいかいながら、その自由と生活を日毎に闘い取ってゆく開拓の地を描いている。それはファウストが、すなわちゲーテが、「幸福」よりもあえて「生きがい」を選んでからであろう。

3. 結び—新たなる生きがいの展望

日本では、生きがいが見失われたとき、生きがいが論議の対象となった。現代の日本人は緊張を欲しているのか、拒否しているのか。人間らしい緊張感の価値が、繁栄という名の虚像と、ストレスの巨大さにまぎらわしく置きかえられてしまっている。

戦後の飢餓の切迫感は、人間の知恵の産物によって汚染された食物の恐怖へと変貌した。それは日々に、しかも確実に心や肉体をむしばみ始めている。もっと根元の問題では、科学が作り出してしまった核兵器が、地球の生命そのものをおびやかしている。すべて個人という単位ではなく、人類全体の死がもたらされる可能性への絶望感が、虚無とストレスとをわれわれに強制している。生きがいとつながる緊張感のさわやかさとは、まったく異質のものである。いわゆるカーとセックスに象徴される現代とテンションへの欲求は、いわば目先の一時的な緊張への逃避であろう。

一方、プロテウスの人間を生み出す上での、マス・メディアの役割が大いに強調されている。現代のマス・メディアが伝えるイメージは、それが地方的なものであれ全国的なものであれ、すべて境界をのりこえ、いたるところに個々の人びとをあらゆるものに触れるようにしむける

11) 本間康平：組織科学 vol 5 No. 2 p. 21 丸善 1971

12) 総理府青少年対策本部：青少年の連帯感などに関する調査報告書 昭和46年9月

が、それと同時に皮相的なメッセージや未消化の文化の要素によって、また大見出しや、際限なく偏ばな考えの強制によって、人生のすべての領域をかく乱している。いわば、一個人として、人ははっきりした境界を保持できないのである。そして、つきせぬイメージの洪水に押し流され、強要され、実際にそのイメージによって行動にうつることはないにしても、行動にうつる可能性はいたるところに普遍的に、同時に与えられているといえよう。

人が職業をもつのは、ただたんにそれで金を得て生活の資とするためだけのものではない。人が職業に意義を求めるのは、職業を通じて他人に必要とされる存在になるということである。人間は、他人にとって必要な存在となることによって、自分の生きる意義を知るのであり、生きがいを知るのである。他人から頼りにされることによって精神が充実するのが人間というものであり、そのような条件の充される生活の場として、家庭と職業があるという。¹³⁾

しかし実際には、多くの職業や職場は、必ずしも、そこで働く者に充実感を与えてくれない。そこで職場以外の場で、たとえば家庭や、サークル活動や、政治その他の公的活動や、遊びに充実感を求めていわけである。生きがいの多様化現象がはっきりとあらわれている。これまでの人間は、あまりにも、職業に従属しすぎてきたようである。これからは、職業を人間に従属させるという考え方に変えるべきであろう。

さらに、生きがいの問題を歴史の進歩という観点から考えることも可能であろう。市井三郎氏¹⁴⁾は、「歴史の進歩とは何か」の中で、つぎのようなことを言っている。

「人がいかなる文化パターンの中に生まれか育つか、という事実はその『不条理性』において、すべての人間に平等なのである。つまり収奪をつづけた先進国の新世代として生まれようが、収奪されつづけた後進国の新世代として生まれようが、そこに『不条理性』のちがいはない。その『不条理性』を自覚するからこそ、当の不条理に対して祖先たちが苦闘の歴史をつづけたことの意味を実感しうる者だけが、みずからの不条理な存在そのものに耐えうるのである。

いや、わざわざ『耐え』なくとも、おれは生きている、と人はいうかも知れない。ただ生きるだけなら、まことにそのとおりであろう。だが人は、生きがいを求めるのではないのか。おれはあいつより『より幸福』であるはずの状況に慣れることによって、遅かれ早かれその主観的『幸福』感は減退してゆく、という客観的法則性が存在するからである。

『幸福の追求』ということが、直接的にはどれほど人間の願望(生きがい)をあらわしているように見えても、それが虚妄となるゆえんである。人がそれぞれの生涯に生きる価値(生きがい)とは、各人がまったくコントロールしえないみずからの出自という『運命』のもとで、各人がそれぞれ特有に負わされている『不条理な苦痛』—より実存する問題—を、どう処理してゆかかということにかかわっている。』というのである。

生きがいの問題は、今後ますます多岐になり、多様な価値感によって規定されていくことは必然であろう。「生きがい」というものは、人間の生存をささえる自我価値であると考えることができよう。「生きがい」を持ってないということは、生存の意義を失うことになるのである。そのような価値意識を自我価値意識と呼んでいる。いうなれば、「生きがい意識」といったものに近いものである。それはある具体的な事実によって証明されなければならない。それが、生きがいの構造であると考えてよいであろう。

13) 佐藤忠男編：岐路に立つ職業人 p. 214～ 東洋経済新報社 1971

14) 市井三郎：歴史の進歩とは何か 岩波新書 p. 209～210 1971